



こどもたちの本音から考える和光市こどもの権利条例と「こどもまんなか WEEK」で感じたこと、そしてこれからの課題

こんにちは、今回こども家庭庁のリレーシンポジウム 学生レポーターを担当した川畑です。

1. はじめに：和光市「こども・若者部会」の活動を通して

昨年「和光市こども・若者部会」の1期生として活動し、今年度で2年目を迎えました。部会では、和光市が制定を目指している「(仮称) 和光市こどもの権利条例」に向けて、当事者であるこどもや若者の視点から意見を出し合い、議論を重ねています。

今回は、条例づくりにこどもたちの生の声を取り入れる取組として開催された「こどもワークショップ」(全5日間のうち2日間)の運営に関わり、あわせて「こどもまんなか WEEK」のメインイベントである「こどもまんなかアクション リレーシンポジウム in わこう」にも参加してきました。

現場でこどもたちと接して感じたことや、講演を通して学んだこと、そして部会メンバーとして見えてきたこれからの課題についてレポートします。

2. 「こどもは大人が思っている以上に周りを見ている」現場での気づき

「(仮称) 和光市こどもの権利条例」は、大人が一方的に決めるのではなく、当事者であるこ

もたちと一緒に考えていくものです。参加した2日間のワークショップ（南児童館や新倉児童館）では、市内の小学生が集まり、「みんなが安心して自分らしく過ごせるまち」をテーマに意見交換を行いました。

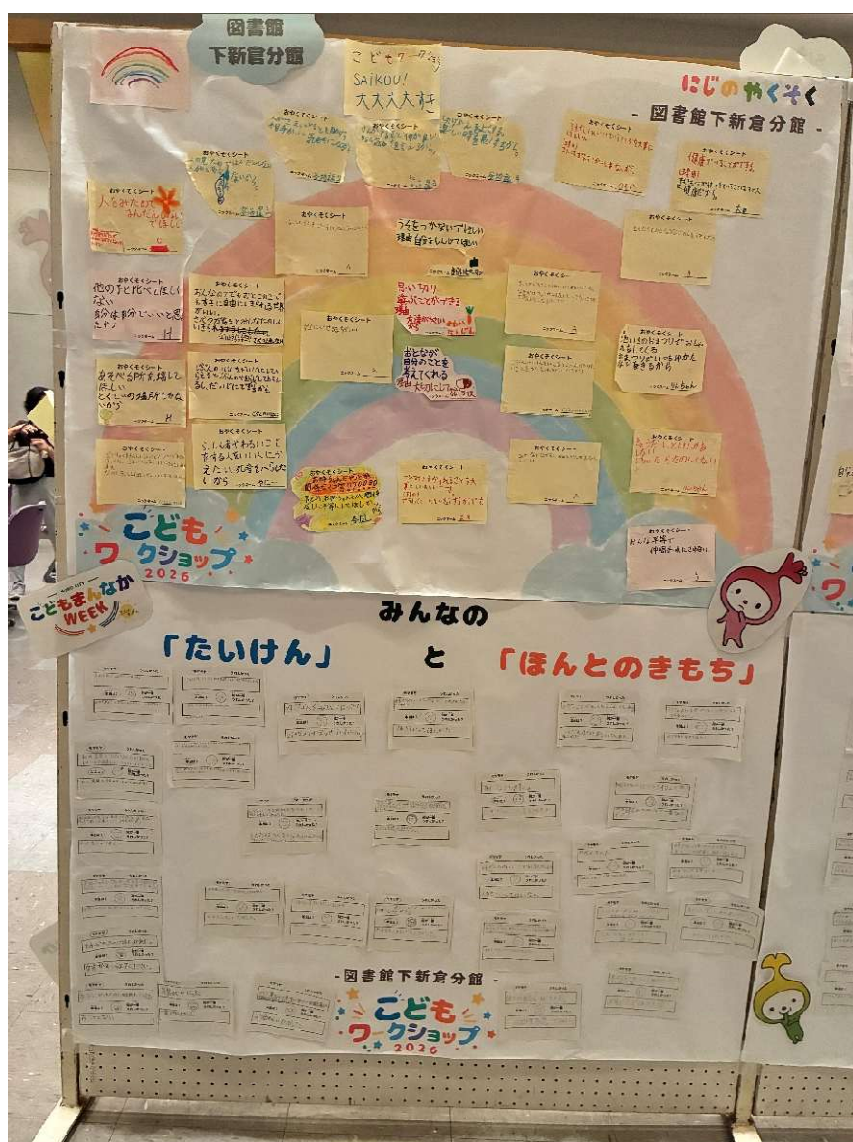
現場でこどもたちと向き合う中で最も印象的だったのは、**こどもは大人が思っている以上に視野が広く、周りの環境や雰囲気をよく見ている**ということです。大人の表情やちょっとした仕草、その場の空気感をとても敏感に感じ取り、私たちが真剣に向き合う姿勢を見せることで、初めて本音を話してくれるのだと実感しました。

また、ハッキリと言葉で伝える子もいれば、じっくり考えた上で文章やイラストにして表現する子など、気持ちの出し方は一人ひとり違っていました。それでも共通していたのは、形は違っても**全員がしっかりと自分の意見を持っている**ということです。



会場に設置されたシールアンケートでは「名前は知っているけれど詳しい内容はこれから」という子も多く、権利について分かりやすく知ってもらう取組がこれからもっと必要だと感じました。

「『こどものため』と決めつけられるのではなく、一人の人間として対等に話を聞いてほしい」「学校でも家でもない、ただ自由にボーッと安心して過ごせる居場所がほしい」といった言葉からは、大人が考える施策と、こどもたちが「本当に必要としていること」の間の小さなズレを実感させられました。



ワークショップで集まったこどもたちの声。色とりどりの付箋やイラストには、こどもたちの日常に根ざしたリアルで切実な思いが込められています。

3. 表に出た声の裏にあるこれからの課題

ワークショップを通じて子どもたちの積極性や可能性を感じる一方で、これから考えていくべき大切な課題も見えてきました。

今回ワークショップに参加して活発に意見を出してくれた子の多くは、自分の気持ちを言葉にする力がある子や、こういう場に参加できる環境にいる子たちでした。もちろん、そうした声をしっかりと拾い上げることはすごく大切です。

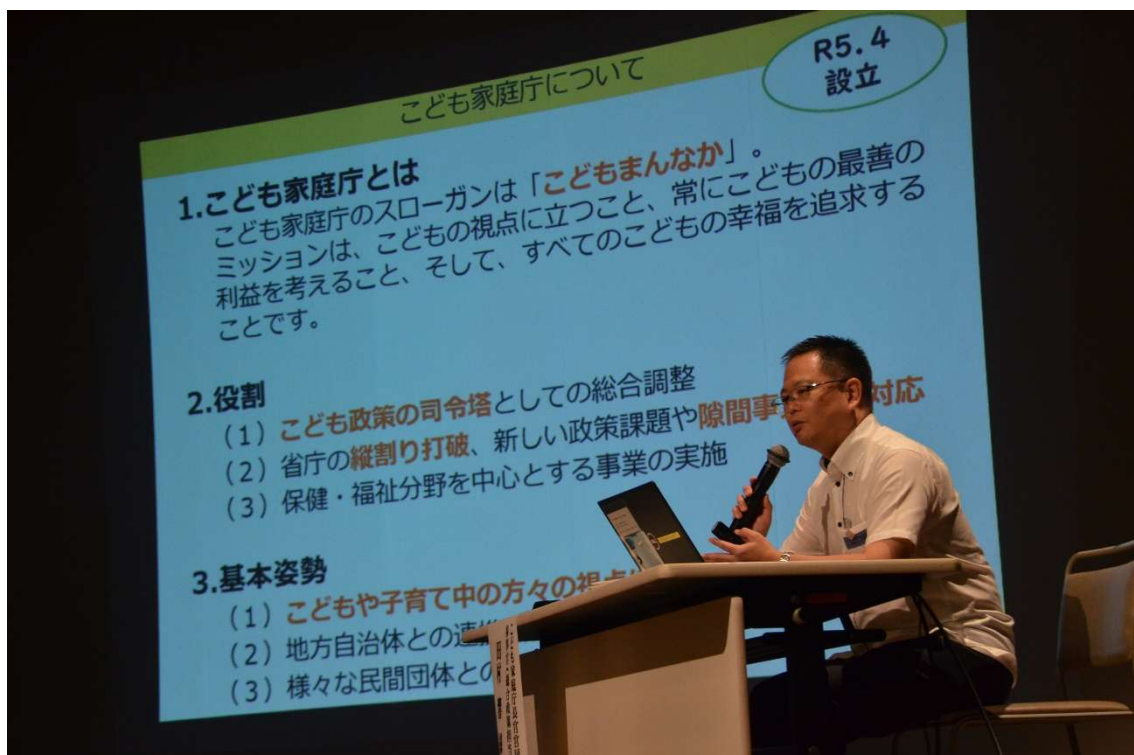
しかし一方で、「そもそもこういったイベントがあること自体を知らない子」や、「様々な事情で、自分の気持ちを外に出すのが難しい環境にいる子」にはどうやって届けていけばいいのだろう、という大きな疑問が残りました。

本当の意味で子どもを真ん中に置いたまちづくりをするためには、表に出てくる声を聞くだけでなく、社会の中で隠れてしまいがちな「声にならない声」をどうやってキャッチし、条例や施策に活かしていくかが、これからの本当の勝負だと感じています。

4. シンポジウムから学んだ「こどもまんなか」のリアルと地域の役割

ワークショップでの学びを胸に、続いて開催されたリレーシンポジウムにも参加してきました。冒頭ではこども家庭庁の職員の方から国の取り組みについて説明があり、国全体としてこどもの権利を守り、声を聞いていく方向性を再確認しました。

続く特別講演では、認定 NPO 法人キッズドア渡辺由美子理事長が登壇され、貧困や格差が子どもたちに与える影響について、実際のデータをもとにお話ししてくださいました。



こども家庭庁田村参事官による講演の様子。こども家庭庁の具体的な取組、役割についてご説明

いただきました。



渡辺理事長による講演の様子。物価高騰が生活の苦しい家庭のこどもたちに与える影響など、リアルなデータを使ったお話にすごく深く考えさせられました。

こどもの貧困対策は単なる支援にとどまらず未来の社会への投資であるという考え方や、物価高騰の影響で「友達とお金がかかるから遊ぶのを遠慮する」「部活をあきらめる」といった、こどもたちの日常にある生きづらさのリアルが語られました。

その後のパネルディスカッションでも語られていたように、行政や学校だけでなく、地域の居場所やフードバンクなど、地域全体でこどもたちを支えるネットワークを作っていくことが本当に大切なのだと実感しました。

5. おわりに：部会メンバーとしてこれから届けていきたいこと

今回のワークショップとシンポジウムへの参加は、こどもたちの持つパワーを感じると同時に、自分にとっても社会の課題について深く考える本当に貴重な機会になりました。

親や先生といった立場とは違う存在だからこそできる役割が、きっとあると思っています。同じ目線に立って話を聞き、こどもたちが構えずに本音を話せるような空気感を作っていくことが、私たち若者の強みであり役割です。

和光市が目指す「こどもまんなか」のまちづくりにおいて、「(仮称) 和光市こどもの権利条例」が、声を上げられる子もそうでない子も含め、すべてのこども・若者にとって安心できる拠り所となる存在になれるよう、これからも部会メンバーとして真摯に向き合い、発信を続けていきま

す！